

「形」について：三木とウィトゲンシュタイン

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-08 キーワード: 作成者: 小田桐, 拓志, Odagiri, Takushi メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24517/00065794 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「形」について：

三木とウィトゲンシュタイン

小田桐 拓志

はじめに

三木清のとりわけ後期の著作では、「形」という概念が頻出する。『技術哲学』（1942年）や『構想力の論理』（未完）においても、「形の論理」は一つの中心的主題である。そして三木の「形」を理解するには、歴史哲学と技術哲学の双方を考える必要がある。『技術哲学』「附録 技術学の理念」において三木は、「技術哲学は歴史哲学を基礎としなければならず、歴史哲学もまた技術哲学を基礎としなければならぬ」と書いている(MKZ7, 315)。三木によれば、技術は単に自然科学の応用ではなく、歴史的世界における出来事である。それゆえ、技術哲学は歴史哲学を基礎とする。他方でさらに、技術とは「新しい行動の形の發明」(MKZ7, 200)であり、また歴史的世界とは形が次々と生起する世界であるから、歴史哲学もまた技術の哲学なしには十分に考察されない。三木にとって人間とは本質的に技術的人間 *homo faber* であり、それゆえ（人間の）歴史的世界もまた技術的性格をもつ。そしてその場合に技術とは、繰り返すように（本能におけるような固定した反応形式と対比して）新しい環境に対する新しい形の「發明」である。技術的人間は制作的であり、それゆえその行動の形は多様である。

多様な形としての歴史的世界は、三木の哲学的人間学（*homo faber* の人間学）の基礎を成しているだけでなく、彼独特の超越性の概念とも関連している。『構想力の論理』において三木は、「先験的に豫定された、一義的な形の世界」を指定する Friedrich Dessauer の技術哲学を批判している(MKZ8, 244)。即ち三木は、形とは単なるアイデア（形相）ではないと主張する。三木によれば、「技術の問題が形の問題に關はること、またそれが何等かの意味において超越性の問題を含むこと」(244)は重要であるが、形とは先験的な意味で超越的であると考えられるべきではない。そうではなく、形そのものが歴史的世界における「發明」「創造」であると理解される必要がある(MKZ8, 245)。そして三木は、この「發明」としての技術の本質を「イデー的な形が物質或ひは自然の中から出て来る」(245)ところ、即ち「ロゴス的なものがパトス的なものの中から生れて来る」(245)ところに見出している（三木自身はそれを「無からの創造」というやや曖昧な表現で呼んでいる）(245)。これらの技術思想の背景には、三木独自のポイエシス概念（即ち超越即内在の「形」の論理）がある。「超

越性」はここでは、Dessauer におけるそれとは本質的に異なる意味をもつはずである。後述するように、超越性とは技術的人間の「離心的 exzentrisch」性格に由来すると三木は主張する(246)。

しかし、Dessauer に対する三木の批判は正当なものであるとはいえ、同時に三木自身の立場も実はあまり明瞭ではない。イデーと自然との対比やパトスからのロゴスといったようなやや文学的な表現だけでは、この主題の十分な記述は困難である。また、技術的人間が環境や自己自身に対して「距離の関係」に立つ（離心性）としても、それは具体的にどのような事実を指しているのであろうか。まして「無からの」創造としてみたところで、なんらかの論理が明確になる訳ではないであろう。

三木が考えようとしたことをより明確な形で現代に生かすためには、三木自身の著作に語らせるだけではきわめて不十分である。歴史を技術的観点から考えようとした三木の歴史哲学は、それ自体は興味深いものではあるが、彼の具体的な記述はしばしば論理的な明確さに欠けている。

従来の（とりわけ日本語圏における）三木研究では、「パトス」「無」などの三木自身による語彙や概念を基本的に信頼して、それらの概念を前提に彼の哲学が論じられることが多い。しかし本稿では、「形」の概念について考察するにあたって、これとは別の方法をとる。三木の著作は三木自身が彼の思想をどう定義していたかについて考えるには有用であるが、その哲学的意味をより正確に考えるにはそれだけでは不十分である。従って本稿では、三木の技術哲学に依拠しながらそれを批判的に再評価し、それによってあるいは三木自身が否定するかもしれない方向に議論を進めることになる。換言すれば、本稿の目的は、1940年代における三木の思索をより現代的な文脈にいわば翻訳することにある。

具体的には、三木におけるポイエシスの概念を、むしろある種の懐疑主義として読み直す可能性を考察する。もし三木が主張するように、技術的人間の行為が「無からの」創造であり、形が歴史的「發明」であるならば、その場合の「形」とはどのように理解されるべきなのか。それは、どのような意味でプラトンのアイデア（形相）思想とは異なるのか。そして、それでも技術の問題が「超越性の問題を含む」とすれば、その場合の形の「超越性」とはどう定義されるべきであるのか。「無」「パトス」「超越性」などの彼独特の語彙の使用からわかることは、三木の思想にある種の懐疑的な傾向があることである。三木における懐疑に三木自身を越えた可能性をさぐるのが本稿の目的である。

アイデア（形相）と規則

プラトンの形相の概念について、西田をはじめとする京都の哲学者たちが（少なくともある哲学的文脈で）批判的であったことはよく知られている。たとえば西田にとって、形相とは有であり、それに対して「形なきものの形を見」（NKZ3, 255）るのが彼自身の哲学である¹。しかし、多くの解釈ではこの批判が（たとえば東洋と西洋というような）地政学的な背景とともに理解されてきたために、その意味が明確になっているとはいえない。こ

れら既存の解釈に共通するのは、京都学派の哲学者たちが自身で描く自画像への（やや過剰な）信頼である。しかし、当時の彼ら自身の言葉がその時代と地政学的諸条件によって制約を受けていることはいまでもなく明らかであるから、その自画像をあまりに表面的に理解するべきではないであろう。むしろ重要なのは、彼らの時代の思想的制約を考慮に入れつつ、その内容をより現代的に再評価することである。

少なくとも日常的な意味で「有」とは目にみえるものや意識されるものを指すから、科学や論理学の文脈ではそれはたとえば観察された物理現象や法則であり、明示された規則、明文化されたプロトコルである²。その意味で、科学技術とはわれわれの行為や自然現象を可能なかぎり可視化する営みであり、それゆえ形相の哲学とともにある。身体について考えてみても、同じことがいえる。つまり通常、身体とはみえるものや意識されえるもの（対象）として理解されている。しかしそれに対して、三木における「形」の論理はどのような自然観や身体像を描いているのであろうか。

物理現象を記述する科学法則に共通するのは、（ある種の）規則の超越性への信頼である。その場合に規則（たとえば物理法則）とはいわば一つのアイデアであり、観察された諸法則は（ちょうど Dessauer におけるような）先験的・豫定的な形の世界を表象するものである。たとえば万有引力は宇宙法則であるが、それはわれわれの宇宙のあり方を豫定的に表象する一つの先験的な形である。しかし、三木が指摘するように、この種のアイデア論は技術の本質（形の本質）をとらえていない。三木にとって技術とは先験的な何かの発見ではなく、むしろ新しいゲシュタルトの発明である。規則とはそのようなゲシュタルトの一つであるにすぎない。しかし、歴史的世界においてそれらの規則に従うとはどのような意味をもつのであろうか。

Rule-following Skepticism と「形」の偶然性

Dessauer が法則（形）を発見されるもの（先験的な形）とみなしたのに対して、三木は形を歴史的世界における発明（新しい環境に対する新しい行動の形）であると考えた。発見と発明のこの違いは、ちょうど規則に対する二つの考え方に対応している。規則（の意味）が先にあるとそれが行動を決定すると考えるか、逆に行動様式の変容が規則の意味を与えていくと考えるかによって、歴史的行為とその超越性に関する理解は大きく異なる。三木が人間を技術的人間と考えるのも後者の考えによるからである。

われわれが自身の行動について考えるとき、しばしば、たとえば規則“+2”の意味を理解することで、ある数列（0,2,4,6,8...）を正しく再現できると理解している。しかし、ある特定の意味の体験が行動を決定すると考えるのは、ちょうど現象がアイデアの模倣であると考えるアイデア論的思考と類似している。そしてそれは、Dessauer の技術哲学と同じ解釈学的誤りを含んでいる。（おそらく三木が主張するように）解釈学的循環とは歴史的出来事であり、従ってその完了した事実から考えるよりも、むしろその形成過程から考えることによって、より多種多様な事実がみえてくるはずである。

この点について後期ウィトゲンシュタインは、いわゆる「規則に従うことについての懐疑」rule-following skepticismを度々提示している。一般にこの「規則に従うこと」の懐疑についての解釈は必ずしも一様ではないが、ある面でそこに三木における技術の思想との類似性をみてとることも可能である。とりわけ、規則や理解をめぐるウィトゲンシュタインの思考実験は、「形」の超越性（それをここではある種の「偶然性」と呼ぶこともできる）をより明瞭に分析している。

たとえば彼は *Philosophical Investigations* 151 で次のように書いている。

Let us imagine the following example: A writes down series of numbers; B watches him and tries to find a rule for the number series. If he succeeds, he exclaims: "Now I can go on!" — So this ability, this understanding, is something that occurs in a moment. So let us have a look: what is it that occurs here?³

A が書き出す数列をみて B がその規則を見つけようとしているとする。うまく規則をみつけた B は「そうかわかった ("Now I can go on!")」と叫ぶ。たとえば A を数学の教師、B をその生徒であると考えてもいいだろう。生徒は練習をくりかえしながら、さまざまな数列の例を習得していく。

これに続けて 185 では、やや奇抜な事例（生徒）が言及される。この事例では、B（生徒）は概ね規則を正確に理解しているようにみえるが、ある数を越えると唐突にその前提が覆される。

Next we teach him to write down other series of cardinal numbers and get him to the point of writing down, say, series of the form

$0, n, 2n, 3n, \text{etc.}$

at an order of the form " $+ n$ "; so at the order " $+ 1$ " he writes |75| down the series of natural numbers. — Let's suppose we have done exercises, and tested his understanding up to 1000.

Then we get the pupil to continue one series (say " $+ 2$ ") beyond 1000 — and he writes 1000, 1004, 1008, 1012.

We say to him, "Look what you're doing!" — He doesn't understand. We say, "You should have added *two*: look how you began the series!" — He answers, "Yes, isn't it right? I thought that was how I *had* to do it."⁴

教師は生徒に " $+n$ " という規則に従うように求める。生徒は 1000 までには非常に忠実に教師の命令に従っている（ようにみえる）。しかし、1000 を過ぎると突然事態が変わる。生徒の行動に隠された数列は " $+n$ " ではなかったのである。観察される行動から、それは " $+n$ up

to 1000, +2n up to 2000, +3n up to 3000”とでも表記されるべき数列であったと後から再解釈されることになる。

「形」が超越的であるとすればその超越性は、ここでは Dessauer におけるそれとは別の意味での超越性である。まずいうまでもなく、生徒が数列を学んでいるとき、学習され習得される「形」（ここでは規則“+n”の適用）は当該主体にとって偶然的である。生徒は当初その「形」を十分に理解していないからこそ、教師について練習をくりかえしている。「形」をまだ習得していない生徒にとって、次にくるべき数はいつも（正答かどうかかわからないという意味で）偶然と感ぜられる。しかしそれだけでなく、実際にはこの命令の意味はそれを観察するわれわれ自身にとっても偶然的である。

この事例はあくまで仮説的な思考実験であり、その思考対象は教師と生徒との対他的な関係に限定されている。しかし、同じ結論は自己知についても該当する。私がある規則（“+n”）の意味を自分が理解しているかどうかを確認したければ、実際に頭の中でその規則を使用してみればよい。しかし、この確認作業は有限回しか試行できない。それゆえ、私自身の意味理解にも、これと同じ不確定性が残されてしまう。

規則は一見明確な「形」を持っているようにみえるが、「形」を支える認識論的基盤は偶然的である。なぜなら、ここで比較されている二つの規則、“add 2 throughout”（1000, 1002, 1004, 1006...）と“add 2 up to 1000, 4 up to 2000, 6 up to 3000, and so on”（1000, 1004, 1008, 1012...）のうち、どちらが自然（な解釈）であるかを定める規則（メタレベルの規則）はないからである。

そして正しく規則に従うことを決めるメタ規則がない以上、規則（のなんらかの意味）がわれわれの行動を決めることはない。むしろ逆に、形とはゲシュタルトであり、形が定まることで後からその意味が確定するのである。

すでに述べたように三木は、技術の本質は「形が物質或ひは自然の中から出て来る」（MKZ8, 245）ことにあると述べている。数列を学習している生徒の行動は、その学習過程では必ずしもロゴス的ではない。意味理解がまだ成立していない生徒にとって自然は多少とも偶然的である。むしろ後からふりかえってそこに数理的な意味を見出すことは（生徒自身にとっても）可能であろうが、そのような考えは「形」の偶然性を誤解している。つまり、三木において「形」の偶然性は、彼の現在主義と密接に関連していると考えべきである。

三木であれば、この「形」の偶然性を（プラクシスと対比して）ポイエシスと呼ぶであろう（MKZ18, 397）。たしかにこの生徒の学習は教師側からみれば成功ではないし、それどころかその「形」の理解はまるで突飛なものにさえ感ぜられる。しかし発想を少し変えて考えてみれば、この生徒の学習行動は、通常とは大きく異なる解釈を自分から思いついているという意味で、独創的であるともいえる。生徒はこの数列（で表象される行動）を他から与えられたのではない。自分の頭で考え、自分で期待される未来を予測し、それに合わせて行動したのである。その意味で、この生徒が示す数理解釈は単なる機械的の反復では

ない。つまりそれは、三木がポイエシスと呼んだある種の制作性を想起させる。あるいはこれら多様な「形」の出現は、西田が「論理と生命」で言及している「無数の種の成立」「創造的世界」に相当する現象と解釈することもできる⁵。ランダムとも見える種々の「形」(の理解)は偶発的であるが、同時に能動的である。

ウィトゲンシュタインはこれらの観察(思考実験)を要約して、“no course of action could be determined by a rule, because every course of action can be made out to accord with the rule”と述べる⁶。われわれが明示的な規則に従っている(とわれわれが判断する)とき、実はそこには無数の意識されない事実が隠れている。規則に関するわれわれの知識と判断はいつも氷山の一角であって、それらに関する多くの事実は意識に上ることさえない。この規則に従う懷疑を、三木に即して次のように言い換えることもできる。形あるもの(形相)は形なきものが限定された影であり、人間の手が一つの道具によって物を作るとき、その背景には(意識に上らない)様々な多様性が隠れている⁷。換言すれば、技術的人間 homo faber の手は無数の「形」をもつ(MKZ18,299)。しかし、そのどの「形」もそれ自体は手という睿智的存在と同一ではない(299)。

三木の語彙でいえば、ウィトゲンシュタインにおける理解(“Now I can go on!”)は、一見ランダムに見える当該課題状況における、新しい「形」の発明である。両者に共通しているのは、あるなんらかの行動様式を「正しい」洞察と考えるのではなく、むしろ無数にある可能性から選択される不確定な事象と考える視点である。そこで起きている事実は観察されるよりもずっと多種多様なものであり、それゆえ学習は表面上ある種の飛躍のようなものとして観察される。それはたしかに「超越的」であるが、その超越性は(現在の自己にとっての)これから起きる何かの超越性であり、一つの「偶然性」に他ならない。

ゲシュタルト心理学が明らかにするのも、同じくそのような意識されない多様性の次元であると思われる。

科学と技術を対比するならば、科学とは発見であり、技術は発明である。科学がアイデア(形相)の豫定的実在を前提とし、それを人間に理解できる言語によって記述しようとする営みであるとすれば、技術とはその逆に、人間の営みがたえず種々の「形」を創造しまたそれらを破壊していくプロセスを指すといえる。技術における「形」の論理は、豫定的な世界観と相容れない。歴史的な「形」の論理を三木の語で端的にいうならば、ポイエシス ποιήσις (ないしゲネシス γένεσις) となる(『構想力の論理』序)(MKZ8,7)。

それでは最後に、そのような技術哲学にとって、身体とはどのような現象であるだろうか。

身体とは本質的に目にみえないものである

規則は目にみえる何か(「有」)であるが、われわれが規則に従うときにその背景にはみえない無数の事実が隠れている。逆説的だが、「形」とは本質的には目にみえないものであ

る。より正確には、「形」そのものは目にみえないとしても、「形」の発明とともにそれまでみえていなかったものが歴史的に目にみえるようになる（γένεσις）。

身体についても同じことがいえる。身体とは種々の「形」であり、ある「形」が定まることでそれまでみえていなかったものがみえてくるようになる。たとえば他ならぬ「みる」という行為自体がすでに、視覚という一つの身体的「形」である。あるいは、（四足ではない）「手」の意識の成立は、直立歩行や道具の使用という「形」と不可分である。「手」は道具を使用すると同時に、それ自身も一つの道具である(MKZ18, 299-300 および NKZ8, 10-11)。先に「形」が目にみえないといったのと同じ意味で、身体も本質的に目にみえないものである。

「形」や身体がこのように目にみえないものであるとすれば、翻ってそれらが「超越性の問題を含む」(MKZ8, 245)とはどのような意味であろうか。「超越性」について、三木は『構想力の論理』で次のように述べている。

ブレスネル等に従へば、人間の存在の特殊性は離心的 *exzentrisch* といふことにある。それは、人間は環境に對して、自己自身に對してさへも、距離の關係に立ち得るといふことを意味してゐる。人間はつねに環境のうちにありながら環境と瞑合的に生きるのではなく環境から超越してをり、同時に逆に環境は人間を超越してゐる。(MKZ8, 246-247)

三木にとって「超越性」とは人間的存在の離心性に由来しており、その場合の「超越」とは内と外への二重の超越である。つまり技術的人間は、人間が環境を超越すると同時に環境が人間を超越するという二重の超越によって成立する。「人間の技術は人間的存在の右の如き超越性によつて規定されてゐる」(247-248)。技術とは歴史的世界における形の変遷であるが、「形」はそのような技術的人間の二重の超越性が表現されたものである。

しかしこの場合に「離心性」とは、現在そのものの構造と考えられるべきではないか。三木はここで超越性を空間的（対他的）な關係に即して記述しているが、歴史哲学における彼の現在主義に立脚するならば、より本質的にはそれは現在がこれから起きる何かやこれまで成立した形に対してもつ離心性に由来しているはずであろう。そして、そのような離心的な現在が種々の形と交差するのが「身体」や「技術」という現象であるだろう。

「身体」が三木の哲学全体において中心的な主題であるのはいうまでもないが、彼の著作では現在がもつ離心的な構造もしばしば身体という現象（たとえば人間の「手」）によって表現されている。三木は1930年代に頻繁に西田と交流をもっているが、そこでも身体はその重要な主題であった。たとえば三木は、1936年2月の日記で、鎌倉に西田を訪ねて身体について話したと記している⁸。さらに同時期の『哲學的人間學』において三木は、次のように書いている。

人間の制作的活動は先づ彼の肉體的組織に制約されてゐる。そのうち決定的に重要な意味を有するのは人間の手である。手が出来ると共に人間が出来た。手の生成と人間の生成とは同時的である。(MKZ18, 298-299)

引用文で三木は、手の生成を人間の生成と同一視しているが、その理由はやはり人間的存在の離心的な性格にある。手は自己の身体であると同時に一つの道具であり、道具とは自己と「距離の関係」にあるものである。つまり、人間の手は人間の離心性と制作性を同時に表現している。「手」という離心的な身体の成立とともに、人間における現在も可能になったともいえる。三木はフランクリンを引用しつつ、さらに次のように述べる。

道具をもたぬ手は手としての価値をもたぬ。人間は「道具を作る動物」 tool-making animal であるといふフランクリンの定義は大きな眞理を含んでゐる。(MKZ18, 299)

手に関する同様の考察は、同時期の西田(『論理と生命』NKZ8, 9-11)にもみられる。西田も同様にフランクリンに言及し、また「手」の二重性(自己の身体であると同時に一つの道具であるという二重性)を論じている。

さらに三木にとって、「道具を作る動物」としての人間の超越性は、制作的であると同時に表現的である。

人間は單に世界のうちに在るといふのみでなく、また世界を作る。凡ての人間の行爲は形成作用の意味を有し、従つて表現的である。(MKZ18, 298)

そして再び『歴史哲學』に立脚するならば、三木においてあくまでこの制作が現在における形成作用・表現作用であることに注意すべきである。超越性(離心性)とはあくまで現在における「形」の發明である。

パンデミック下の身体

ところで身体とは目にみえないものであるということを端的に示す事実を、われわれはごく最近経験している。Covid-19のような微粒子は紛れもなく身体を構成する種々の現象と関わっているが、その影響がパンデミックという目にみえる社会的脅威として現れるまでは、多くの人々はそれが身体的な何かであることを意識することさえなかった。その意味で、パンデミックはそれ自体が一つの新しい身体的「形」である。それまで身体とは、あるいは人間的な主体(やその社会性)と関係する何かであり、あるいはコギトの明記性から疎外される何かであり、またあるいはコロニアルな生権力構造を表象する何かであった。これらいずれの身体論も、身体そのものの物理的・感覺的な実体性を自明なものとなしている。これら既存の哲学・批評理論にとって、身体が目に見えるものであることは

当然の前提であり、その前提が疑われることはほとんどなかったのである。しかし、たとえば Thomas は、“History and Biology in the Anthropocene” (2014)の中で次のように述べる⁹。

“The human body contains trillions of microorganisms—outnumbering human cells by 10 to 1.” Jaw-dropping though this ratio is, it hardly conveys the drama of the new findings. After all, microbial cells are so tiny compared to human cells that they make up only 1 to 3 percent of the body weight of a normal adult. More to the point, the Human Microbiome Project reveals that microbes are neither “passive riders” nor our incidental allies, aiding digestion and the like. Instead, they are inseparably “us,” more responsible than “we” are for “our” existence by most calculations on this micro level. In fact, “this plethora of microbes contribute *more genes* responsible for human survival than humans contribute. (1594: emphasis in the text)

もちろん細菌 (“microbial cells”) とウィルスとは異なるのでこの事実がそのままウィルスにも当てはまるかどうかはわからないが、ウィルスの細胞内への侵入機構 (細菌があくまで細胞であるのに対し、ウィルス粒子の本体は遺伝子である) を考えると、むしろある種のウィルスこそここでいう遺伝子的な「われわれ」により深く関与している可能性がある。いずれにしても、目にみえない何か (しかもわれわれが他とみなしている何か) がわれわれの身体 (あるいはわれわれ自身) を構成しているのは紛れもない事実であり、従来の身体論はこの単純な事実を目をむけずに展開されてきたといえる。Thomas の論文の全体の論旨において身体論はそのごく一部をなすにすぎないが、しかしその主張は本稿の文脈で重要な意味をもっている。三木の文脈でも、身体とは目にみえない種々の「形」をなすものであり、しかもそれ自体はこれまでで成立したどの「形」とも同一ではない。身体はつねに「他のもの」(MKZ18, 399)から規定されている。

パンデミック下の身体は新しい「形」を獲得しつつあるといえるだろう。しかしさらに正確に言えば、Thomas の論文において NIH の報告に基づいて描かれた身体像はたしかに日常的には「目にみえない」微細な現象ではあるものの、しかし実はそれらはそれでも十分に可視化された身体現象であることに違いはない。つまり微生物や微粒子の世界は、人間の身体をめぐる考察への入り口にすぎない。実際には、身体とはより本質的に目にみえないものであり、その現象には三木のいうポイエシスが深く関わっている。つまり、みえないものがみえるようになるというそのプロセスにこそ、身体の本質がある。身体とは、西田の語を借りれば「形なきものの形を見」る経験であり、また三木によるならば発見ではなく「發明」である。

「形」をめぐる三木の考察は、おそらくは西田との相互影響下に形成された着想であると推察されるが、『哲學的人間學』『技術哲學』から『構想力の論理』に至る彼の技術思想

の一つの核心をなすだけでなく、このような現代的文脈においても一定の有用性をもって
いると考えられる。

(金沢大学国際基幹教育院准教授)

略号

MKZ 『三木清全集』大内兵衛, 東畑精一, 羽仁 五郎, 榊田啓三郎, 久野 收編集, 岩波書店, 1966-
1968年。

NKZ 『西田幾多郎全集』竹田篤司, クラウス・リーゼンフーバー, 小坂国継, 藤田正勝編集, 岩波
書店, 2002-2009年。

注

- 1 よく引用されるように、『働くものから見るものへ』序文で西田は「形相を有となし形成を善となす泰
西文化の絢爛たる発展には、尚ぶべきもの、学ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年来
我等の祖先を学び来つた東洋文化の根底には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云つた
様なものが潜んで居るのではなからうか」(NKZ3, 255)と書いている。
- 2 論理判断における規則の意味と西田における意識のノエシスとの関係については、下記を参照。
小田桐拓志「外在する一人称 西田の合理性命題をめぐって」『哲學』62号(日本哲学会), 2011年,
195-196頁。
- 3 Ludwig Wittgenstein. *Philosophical Investigations; the German text with an English translation* by G. E. M.
Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. Revised 4th edition by P. M. S. Hacker, and Joachim
Schulte. Chichester, West Sussex, U.K.; Malden, MA, Wiley-Blackwell 2009: 65^e, Sections 151.
- 4 Ludwig Wittgenstein. *Philosophical investigations*: 80e-81e, Sections 181.
- 5 「弁証法的一般者の自己限定の世界, 創造的世界の自己限定は, 無数の種の成立といふことでなければ
ならない。」(NKZ8, 18)
- 6 Ludwig Wittgenstein. *Philosophical investigations*: 87e, Sections 201.
- 7 『哲學的人間學』において三木は「既にアナクサゴラスは、人間は手によつて動物よりも賢い、と考
へたと云はれる。然るに手の成立と同時に道具の成立がある」(MKZ18, 299)と書いている。
- 8 上田閑照『西田幾多郎哲学論集第2巻』「解説」, 1988年, 413頁。
- 9 Julia Adeney Thomas. "History and Biology in the Anthropocene: Problems of Scale, Problems of Value"
The American Historical Review, 119 (5), 1587-1607.